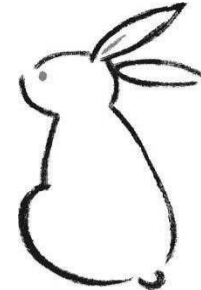




# Shiro-usagi

白兔・素兔



平川塾HP



アメブロ



YouTube

文責：平川 達三

## 「365日みそ汁」は「気づき」の教育

何のタイミングだったか忘れてしまいましたが、このようなことを耳にしたことがあります。

「うどん屋は店を閉めてからが勝負」

定時に開店し、ほぼ定時に閉店する。その営業時間内は、もちろん精一杯の接客。

それは当たり前の話。

そんなところで「差別化」なんて言っているレベルのお店なら、その辺にゴマンとあります。

これは、ずっと前に書いたことがあるのですが、京都のお店だったと思います。

何気ない言葉なのですが、一度目にするとずっと頭に残るのです。

「365日みそ汁」

木片に縦書きで書かれていて、店の軒先につるされています。そして時折、風のいたずらを受けてはクルクルと回ります。

料理業界では有名なお店なのだそうで、ここで修行した料理人は、必ず有名ホテルの日本料理の匠になるのだそうです。

その教育法は、何も教えないこと。

修行人は、ただひたすら、毎日、わかめのみそ汁・炊きたてのご飯・お漬け物を盆にのせ、「師匠」のところへ運んで行く。主である「師匠」は、ただ黙って食するのみ。

食べ終えた食器は再び盆にのせられ、廊下に置かれる。頃合いを測り、修行人がそれを黙って静かに持ち去るのみ。

それが365日続くのです。

そのうちに、何も教えてくれない「師匠」にじびれを切らせて辞めていく者が、今日は1人、明日は2人という具合に現れる。そして最後に残るのは、大抵は1人なのだそうです。

修行開始から2年ほど経たある日、たった一言「師匠」から告げられます。

「そろそろ、店に立つか？」

すごいレベルの話だと思いました。毎日、気温や湿度が違う。特に京都は夏の暑さも冬の寒さも、厳しい。京都に限らず世界のどの地であっても一日として同じ気象状況の日はありません。

ことに日本は四季の変化がはっきりしていますから、その自然の微妙な変化を前にして、それでも「同じみそ汁」が作れるかという、プロの料理職人としての資質が問われます。

最初は、毎日、味が違う。それがやがて、毎日ほぼ同じになるといいます。

わかめのみそ汁は、味を安定させるのが最も難しく、作る人の心を反映させるのだそうです。



な邦訳か所が出てくるからです。

英文の基本的な邦訳としては正しいのでしょうか。でも、文書全体の流れ、ことに前後関係から判断することで、原文（英文）を発信する側がその文に特別な意図をこめて比喩的に使っているようなときは、さすがの Google AI も、それこそ付度できないのです。

例えば…

What do you do ?

基本的な邦訳は「あなたは何をしますか？」で正解です。

でも、レオナルド・ディカプリオが相手の至近距離で（相手に）銃を向け、

What do you do ?

と言った場合の邦訳が、「あなたは何をしますか」では、シリアスな映画がコメディ映画になってしまいます。

実際にこのシーンがあるのですが、ここにアテがわかれていた字幕スーパーを見たとき、「上手いな〜！」と、思わずうなっていました。

## 「教える」「伝える」

これは数年前の話です。

かつては塾生のお父様で、私が現在暮らしているマンションのオーナーさんでもある、ちょっと不思議な存在のKさんがいらっしゃいます。

とにかくこの方とお話をするだけで元気をいただけます。御年80歳。肌つや良くお元気です。とにかく声が大きい。その張りのあるお声はお子さんと関わらせていただいた十数年前と全くお変わりありません。

そのKさんとは、今でも時折ですが歴史談義に花を咲かせます。

「先生と歴史の話をしてたらおもしろいねん。つっこんだ歴史の話をやね、出来る人がなかなかおらへんねん。」

読書家でもあるKさんにそのように言っていたのは、嬉しい限りです。

そのKさんが、数年前に示唆に富むことをおっしゃったのです。

「これからの時代は権威が消えて権力が幅を利かすやろね。それと、コミュニケーションの時代やね。ワシはもう年やし、SNSとかいうやつ？ そ

なぜなら、こうなっていたからです。

「さあどうする。」

物語の流れの中で、そこにふさわしい邦訳をどのように表現するのか、その判断に必要なのはあきらかに「読解力」だろうと思うのです。

この季節になると、転塾されてくる生徒さんに巡り会うことが少なくありませんが、私の塾のHPには「国語指導専門」は決して謳っていないのです。

国語が大事。

そう思って一生懸命指導しているうちに国語読解の指導が得意になりました。でも、ほかの科目の指導も出来ます。

こういうスタンスなのです。（ただし、このスタンスは3年前にこの原文を書いたときのお話です。改筆をしている現在では、より専門的な国語指導へ進化している状態です。）特に受験学年になると、国語の出題レベルが中学1・2年生のときのそれと比べると「豹変」という言葉がふさわしいくらい急に難しくなったりすることもあるようです。

れを使う機会もないけどね、先生なんかまだまだ若いから、これからはフルに活用する時代になるとちゃうかな。」

数年前なので、SNSといわれるコミュニケーションツールといえば、Lineと messenger くらいで、Instagramが始めた頃でしょうか。

まさか日本国の総理大臣や各省庁の大臣、あるいは、アメリカやロシアだけでなく、いわゆる国家元帥クラスの人が発信する「つぶやき」を気軽にフォローできて、しかも、その気になれば（私はしたことがないけれど）質問を投げかけることも出来るようになるとうとは…。

だって、Twitter が登場するまでは、遠目でも滅多にお目にかかれないし、ましてや近寄ることなんてほとんど出来ない存在だったはずが、確かにいくら何でも友人に話しかけるようにはできないけれど、彼らが発信した「つぶやき」についてなら、フォローさえすれば、いつでもどこでもスマホなどの

端末機で見る事ができて、「その人」の存在をじかに感じる事が出来ます。

しかしその反面、それをもっと身近に感じるためには英語力をはじめとする言語力の必要性を頓（とみ）に感じさせていたのがつい数年前だというのに、さらにここ半年で、「英語力」という部分は「読解力」という言葉に書き換える方が良いのではと考えるようになって来ています。

というのは、例えば、英文の邦訳を Google AI に、それこそコピーしてお願いすれば、ものの10秒で事が済みます。しかも、めちゃくちゃ邦訳が滑らかになっていて、確かに前後関係から判断すればナンカ変だなというところはたまに出てくるものの、邦訳を見た瞬間にのけぞるほどの笑いがこみ上げるような、ある意味での「曲芸」を見せてくれたつい5年ほど前の状況なんて、「今は昔」のレベルです。

でも、最終的には、それを利用する側の人間が必ず点検しなければならぬのです。というのは、邦訳は滑らかになっただけのものは、時折、やはり妙

<p>中学3年生の1学期中間を経て期末考査の結果も出、あれよあれよと下がってくるというようなことも往々にして起こり得ます。</p> <p>ところが、単に難しくなったという単純な理由だけでは解決できないような下がり方をする生徒さんもいるのです。こんな感じですね。</p> <p>数学・理科・社会は高得点のまま推移していて、英語がやや下がる傾向が見られるものの、それでもかなり高い点数を維持しているのに国語だけが下がってくるという事例です。</p> <p>ご本人と親御様からすると</p> <p>「ナンでやろ？ ナンでやろ？」</p> <p>なのですが、</p> <p>このように、ほかの科目は無事なのに国語という一角が崩れ始めるという一見すると奇妙に見える事例の奥底には次のような原因が隠されていることも少なくありません。</p> <p>問題に使われる題材文に答えとなる部分がはっきりと書かれていない場合、段落全体を読んで、あるいは題材文全体を読んで、筆者の考え方や登場人物の心模様の変わり方などを、行間にまで想像力を働かせ、それにふさわしい</p>	<p>言葉を自分の語彙の中から引っ張り出さねばならないのです。</p> <p>こういう問題が中学3年生になると、徐々に登場させられてきます。こうなると、題材文を読む前に設問の方から読んで、書かれている箇所を見つけ出して答えるなどという「小手先のワザ」なんぞは通用しなくなります。</p> <p>そうなると、指導者は、題材文にアプローチをするための特に高度なスキルについては、教えるのではなくて伝えねばならなくなってきます。</p> <p>教えるとは、一方的に指導者が説明し、その場で解けるようにすることで理解したような気分させるだけのこと。</p> <p>伝えるとは、説明や解説はするけれど、それから1週間ばかりを経て再チャレンジしたときに、伝えられたときのことその生徒さんの脳裏で再現できるようにすること。</p> <p>そのためには、教える側と生徒さんとその授業時に題材文や設問についてどれだけの議論をし、その議論の内容がいつでも再現できるくらい指導者がその足跡を題材文内に書き込んで残せているか。</p> <p>国語読解指導とは教えるのではないのです。伝えなければ意味がないし、その生徒さんの力として実を結ばない。実を結ばないのであれば、伝えたことにならないのです。</p>	<h2>「怖い蟹」は「こはいかに」？</h2> <p>先日、高校生君と古文の授業をしているときに、ふと尋ねたのです。</p> <p>「～ならず」という表現が古文にはよく現れます。</p> <p>「～あらず」は、「決して～ないであろう」という強い否定の推量です。</p> <p>「やって見せて、言ってみせてさせてみて、褒めてやらねば人は動かじ。」</p> <p>という、山本五十六氏の名言の「動かじ」が、それにあたります。</p> <p>この話をしていたのです。で、新たに尋ねたのはこの行（くだり）。</p> <p>「情けは人のためならず。」</p> <p>かなりレベルの高い私立高校に通うA君に尋ねると、</p> <p>「『人に情けをかけるのはその人のためにならないからかけない方が良い』でしょ？」</p> <p>と答えました。</p> <p>もうひとりにも同じことを尋ねました。この生徒さんは中学3年生。5科目で450点超えのBさんです。</p> <p>すると、ほぼ同じ答えでした。</p>	<p>私が大学で教育課程の講義を受講していたときに、浦島太郎の話が出ました。</p> <p>竜宮城から浜辺に帰り着いた直後に開けてはいけない箱を開け、中から出て来た白煙を浴びた末に、浦島太郎があっという間に老人になったときに発した言葉がこれです。</p> <p>「此は如何に」</p> <p>「こはいかに」と読みます。</p> <p>ところが、浦島太郎の紙芝居を園児のために作っていた教育自習生が、「こはいかに」の意味が分からない。</p> <p>明日のための教材作りだったため、字面（じづら）だけをとって「怖い蟹」とした、というのです。</p> <p>「浦島太郎さんが浜辺に戻り、箱を開けると、もくもくと白い煙が出て来ました。すると、浦島太郎さんはあっという間におじいさんになってしまったのです。そしてそのとき、どこからか怖い蟹さんがやって来ました。」</p> <p>その話を講義で教授から伺った瞬間に、「それはないやろ！」と、心中で強くつつこむ自分がいたのです。</p>
<p>「これは一体どうしたことか？」が怖い蟹の登場では、その後、話のオチをどうつけたのやら…。</p> <p>「こんなことやっちゃあ、園児さんに間違っただけを教えることになるのでね。初等科教育でしょ？ 高校生なら『そんなことあり得へんやろ』ですみませんけれどねえ。困ったモンです。」</p> <p>と、教授の言でした。</p> <p>話を戻しますが、この高校生のA君、入試の前にことわざとか慣用句の勉強をきっちりとしたのかしら？</p> <p>自称「理系」さん。古文、大嫌い。ついでに漢文も。</p> <p>ワタシが高校生時代に思っていたことと判を押したように同じ。</p> <p>ただし、ワタシは「理系」ではなくて「ド文系」だったことが異なる点。</p> <p>文系のヤカラが古文・漢文が大嫌いとは、不逞の輩というのか、救いようのないヤカラというのか。でも、その分、キライという気持ちはよ～く分かります。</p> <p>「ボク、歴史大嫌いです。」</p> <p>と、高校3年生のときに世界史の先生にぬけぬけとヌカしたワタシ。</p>	<p>すると、</p> <p>「歴史はな～、40歳を超えてからもういっぺん勉強してみ。オモロイぞ～！」</p> <p>と、おっしゃって下さったのに、ずっと「歴史＝オモロない」を通していたのです。</p> <p>ところが、あることをきっかけに歴史を勉強しなければならなくなったとき、最初は義務感だったものが、あれよあれよという間に歴史の世界にはまり込んでしまったのです。</p> <p>なるほど。先生がかつておっしゃったとおり、40歳を超える頃でした。</p> <p>そしてときを経て、</p> <p>「せんせ～、ナンで死んでしもた人のことばかり勉強せなアカンのん？」</p> <p>と、歴史を指して嘆く当時塾生だった子を前にして思わず言ったのが、これでした。</p> <p>「うん。ボクもそう思ってたんやけどな、40歳越えてからオモロくなってきてん。」</p> <p>これぞ「歴史は繰り返す」。</p> <p>それで、「情けは人のためならず」について、恥ずかしながら、40歳くらい</p>	<p>までは、A君やBさんと同じように思っていました。</p> <p>こんな状態で塾屋稼業をしていたんですから、「知らぬが仏」とは「こはいかに」。</p> <p>このついでに書きますと、その高校生君とか中学生君でなくても、「鯛の尻尾付き」を「鯛のお頭付き」と思っている立派な大人が結構な数でいるらしいのと同様に、「人のためにならないから情けはかけない方が良い」と思っている学生さんとか大人って、かなりの数になるのでは？</p> <p>「これはね、人に情けをかけて優しくしておくとな、あなたは今勢いが良いかも知れないけれど、いつ何をきっかけに勢いを失って困るかも知れない。そのときになって、助けたり親切にしたりした人からなんてこともあるけれど、大抵は思いもよらないところから救いの手をさしのべてもらえるものだ、つまり、人の情けはまわりまわって自分にも返ってくる、という意味なんだよ？」</p> <p>こう言うと、とても驚きます。</p> <p>「情けは人のためならず、まわりまわって自分にも情けをかけてもらえるものだ」</p> <p>というのを全部言わずに、「ならず」</p>	<p>で止め、全部を言わないことによる含みを持たせるのが、日本語本来のよきところ。最後まで言ってしまうと親切を施した人に恩着せがましくなる。恩を着せないでさりげなくし、されるがわりに恩の負担をかけない。これぞ古来日本人の心情なのです。</p> <p>この流れで、「因果応報」についても解説しようとしたら、</p> <p>「悪いことしてたら いつか見つけてバチが当たる」</p> <p>という答えが、これもまた先ほどの高校生と中学生から即座に返されてきました。</p> <p>う～ん。確かにね～。</p> <p>戒めというのか古代日本の政治がらみというのか、仏教を上手に使い、悪いことをしたヤカラたちが地獄へ墜とされて、という地獄絵図で、因果応報を教えたのでしょね。</p> <p>当時は現代よりも神様とか仏様を尊敬し畏れたでしょうから、この絵にも強烈なインパクトがあったでしょう。</p> <p>でも、この四文字熟語、よ～く考えると…</p> <p>「因」は原因、「果」はその結果。</p>

「応」は自分の言動。  
「報」はその報い。

良い要因の結果は行いに応じて報われ、悪の要因の結果もまた推して知るべし。そういう意味もあるのです。

でも、これではインパクトが弱い。ではどうやって当時の庶民に道徳観を伝えるか？



そこで閻魔様のご登場となったのでしょね。

しかしながら、江戸時代の、特に上方人（かみがたじん）は、この地獄の閻魔大王に対してでさえ「笑い」のネタにしたのです。

『地獄八景亡者之戯（じごくばっけい・もうじゃのたわむれ）』

「ただいまより、閻魔様のお顔をお見せいたしまする～！ 閻魔様のおな～り～！」

この口上と共に閻魔様を模した噺家の顔にどっと笑いが起こる。人の発想力のたくましさ・・・！

こういうことを若いときに勉強するのもまた国語の勉強でしょうか。

さもありなん。むべなるかな。

## あと97個のおいしいパン

皆さんはLINEをどのように使っていますか？ イマドキのお若い人の中には、「既読」とか「既読スルー」が絡んで心の負担になるから、さらには、負担を通り越して重くのしかかってくるといったような強迫観念に駆られ始めるとかで、スマホ自体から離れてガラケーに戻る場合も少なくないそうです。

ワタシみたいに年を食うった者からすると、「鶏飼いの鶏とちゃうぞ」とか「指先一本で人を操れると思ってるヤツとはつき合う必要はない」と一蹴したり憎まれ口をたたいては、

「嫌うヤツは嫌って結構、その方がこっちも楽になる」

というくらいに心自体が厚かましくなっているのです。気に病むということはなくなりましたね。

それよりも、この年齢になると、肩が痛いやら腰が痛いやらで、お若い人のような機敏で正確な動きとはもはや縁遠くなってきた分、言葉が巧みになると同時に言い訳が上手になってきて、厚かましさに輪がかかります。

尤（もっと）も、仕事となると、年齢を重ねた分だけ発した言葉にも説得力が出てくる分、それだけ責任もついてきます。

私が意を決して（？）LINEを使い始めたのは、Androidスマホの2年間を経てついにiPhone11を手にしたときからですが、緊急事態宣言発出のときのスマホとLineの圧倒的な機動力には驚かされると共に、その前の年末に機種変更して良かったと思われたものです。

が、その分、お若い方よりも、かなり厚かましくなっているとはいえ、緊急事態宣言解除までの2か月間を（ZOOMの通信授業の方でお問い合わせや受講希望者数が急に動き始めたので、実質的には4か月間）、ほとんど不休で突っ走ったあとで、やっと戴けた「夏休み」でさえ旅行先までLineメッセージが追いかけてきて、ちょっと辟易させられました。

なるほど。これが何回も続いたら、この厚かましいこのオジサンでさえ、ガラケーに戻るかもしれません。

それにしても、脱テレビ6年目といえ

ども、SNSを通して入ってくるニュースって、ナンで見事なまでにマイナスの気を帯びているのかと、こっちはこっちで辟易させられます。

このスマホのLINE自体についてのニュース記事ですらそうですよね。イマドキのお若い方が、スマホからガラケーに戻る理由からして、マイナスの気を帯びた内容しか情報発信側は流そうとしない。

塾舎にある小学3年生の国語読解の教材（小学生国語コア）に、「おいしいパンの呪い」というお話があります。

「おいしいパンを作るためなのだから『お祈り』でないといけないのに、ナンで『呪い』なんだろう？」

と、パン焼きの娘さんが魔女の言ったことに疑問を抱くのです。

その魔女が言うには、

「おいしいパンだけを100個焼こうとしても必ず1個はまずいパンになる。その理由は、良いことだけを欲張って取るのではなく、1個くらいの悪いことも受け入れないと、99個のおいし

いパンは焼けないんだよ。」

良い結果を求めるのなら、わずかな悪いことも引き受けなきゃならない。

LINEって便利ですよ。緊急事態宣言発出時にはその素晴らしい機動力に、ワタシは随分と助けられました。これが99個のおいしいパンの方です。

その一方で、やっといただいた夏休みの、それも初日の旅先にまでLINEメッセージが追いかけてきて、ちょっとうんざりとした。これが100個めのまずいパンです。

大切なのはこのバランスなのでしょう。要は使う側の受け取り方なのです。

何度も申しませんが、スマホのLINEの機動力のおかげで、塾の生徒さんとも生徒さんの親御様とも、ほとんどトラブルなく、危機的状況を乗り越えさせてもらいました。

その後も、特にZOOMで遠隔授業を受けて下さっている親御様とのやり取りは、かなり濃密なままです。

確かに、正直申し上げますが、決して楽ではありません。もう勘弁して下さいという想いをひた隠しにしてやり取りしていることもあります。

でも、99個のパンの方が多いのです。勘弁して下さいという想いが100個めの、世にもまずいパン。とはいうものの、99個のおいしいパンの中味が全部分かったわけではありません。

でも、たったふたつだけですが、分かったことがあります。

それはとても素敵なことです。

メッセージのやり取りは文字として残ります。残るからこそ、言葉を選ばなきゃいけない。尤もこれは、親御様へメッセージを発信するこちら側の責務です。曲がりなりにも指導者の冠を掲げているし、ましてや国語の指導や言葉の指導を生業（なりわい）にしている立場ですから。

でも、親御様も言葉を選んで下さっているはず。なぜなら、親しくメッセージのやり取りをして下さってはいても、友達同士のやり取りではないからです。

たとえ友達同士でも、文字として残るから、実際のおしゃべりとはどこかが違うはず。この文字として残る機能があるから、読み返すことができます。何度も何度も・・・。

すると、その台詞やメッセージの向こう側にもうひとつの隠された親御様の想いが見えてくるのです。

でも、それを上手に隠しながら、こちらに気づいて欲しいという意図を含ませたメッセージを送ってこられる親御様は、ほとんどいらっしゃいません。

むしろ、

「お母様は、実はこういうことをおっ

しゃりたいのではありませんか？」

という、いわゆる親御様が上手く言語化できないことを読み取り、僭越ながら代わりに言語化して差し上げると、

「そうそう。それが言いたかったんです！」

となることも、しばしばだからです。

こういうやり取りを通して、親御様が何を望んでいらっしゃるのか？

それは、お子さんの近未来のお姿を出るだけ具体的なイメージで示して差し上げること。

塾のチラシによくあるような、大風呂敷を広げたような、現実を知り尽くしている発信者側にとって、とうてい叶えられぬ夢と知りながら、そのはかない夢をチラシを見る親御様に抱かせるような質の悪い文言ではなくて、もっと子どもさんに、それこそZOOM（近づいてみることを）して、つぶさに観察し、さまざまな手法を試しながら、少しずつ少しずつ塾長の頭脳に蓄えられた、その子の生きたデータをもとにした中身のぎゅっと詰まった根拠で以て確実に作り上げられた、そのお子さんの近未来への信頼度の高いイメージ。

そのイメージの中に、親御様でさえ気づいていらっしゃらないお子さんの可能性が含まれていたなら、親御様にとって本当のサプライズになります。

こういうようなイメージの示し方が、

大事なんだろうな。

99個のおいしいパンのうちの2個、みつけた！

LINEメッセージの良さを見つけた！

親御様へのサプライズプレゼントを見つけた！

これで2個の、世にもおいしいパンが出来た。あと97個。どんなパンが出来るのでしょうか。



小学生国語コア3年生。  
出典：安東みきえ「呼んでみただけ」

文章自体は会話文を主軸に比較的易しい言葉で展開されていくので読みやすいのですが、テーマは哲学的です。ですから、生徒さんにとっては理解しづらくて、大人でもなかなか分かりやすく説明するのが難しいですね。

## 『光る地平線』

魚住直子著『クマのあたりまえ』に収録されている何とも不思議な物語です。

\* \* \* \* \*

若いライオンが食べ物にありつけず死にそうになっている。もうここで自分は死んでしまうのかと力尽きかけたとき、不思議な光景を見る。肉食動物が列をなして何かを待っているのだ。チーター、ライオン、トラ……。みんな痩せこけていて毛づやも良くない……。

見ると、列の先の方で1頭ずつ肉をもらっている。若いライオンもその列に並んだ。自分の番が来て、同じように肉をもらった。むしゃぶりつくように食べたあと、われに返った彼は肉を与えている者を見た。

自分と同じように痩せこけている老ライオン……。不思議に思ったので、尋ねてみる。でも、無愛想で何も答えない。

肉をもらった者どもは食べるものを食べたなら、そのまま誰もいなくなった。

老ライオンもその場を立ち去った。そのとき、この若いライオンは追いかけてもしなかった。

やがて時がたち、若いライオンは元気を取り戻し、精力的に狩りをした。そこでふと考えた。インパラを捕まえてその場で殺してしまっは、また狩りをする必要はある。

そこでこんな手を考えた。インパラを生け捕りにして、自分が住みかになっている洞窟に閉じ込める方法でどんどん生きてまま捕まえて洞窟に溜めておく。そのとき、逃げないように洞窟の出入り口は大きな岩でふさいでおく。そして時々岩の隙間から草をやりさえすれば、インパラはずっと生きている。

これは名案だ！　これで自分は活きの良い肉をいつでも食べることが出来る。なんて頭が良いんだ！

すると、どこからか噂を聞きつけて、雌ライオンや自分よりも若い雄ライオンが集まってきた。

自分に仲間が出来、群れを持つことが出来た。

狩りをする必要がなくなったので、若いライオンは集まってきた者たちに昔話や苦勞話をした。すると、いたわりの言葉をかけてくれた。彼はそのいたわりの言葉を聞くのが大好きになった。しかしすぐに洞窟のインパラがいなくなった。何なことはない。食べ尽くしたまで。すると、あっという間に雌ライオンが去って行き、若造の雄ライオンは牙をむき出して威嚇した。

若いライオンはまた孤独になった。しばらく狩りをしていないので、体がなまり、狩りは成功しなかった。

やがでまた痩せこけていき、同じような境遇に陥ったとき、同じような光景に出会った。例の老ライオンが肉を与えている場面……。

同じことが繰り返された。しかし、今度は、自分が食べ終わり、集まってきた者たちも去ったあとで、その老ライオンに尋ねてみた。

満月の夜だけ自分が捕らえた獲物を分け与えている。とはいうものの、その老ライオンだってそんなに余裕があるようには見えず、むしろ自分と同じように痩せている。それなのに、なぜ、他の者たちにわざわざ分け与えるのか？

やがて老ライオンは無言で歩き出し、地平線が見渡せる丘に來た。今度は若いライオンも後に続いた。見ると、地平線から朝日が昇りかけている。何ときれいなんだろう。そう思っていると寡黙（かもく）な老ライオンが言った。

「どうしてきれいなのか、わかるか？」

答えに戸惑う若いライオンにこのように言った。

「生きているからだ。」

若いライオンはもう一度、精一杯生きてみようと思った。

\* \* \* \* \*

この若いライオンのことが、読んだ瞬間に、あることと重なりました。

この次を読まれて気を悪くされた方がいらっしやったら、ごめんなさい。というのは、

「自分はどん底からこんな方法で金儲けをした。」

そういうサイトの宣伝文句がブログにも Facebook にもしきりにアップされてくるし、その発信者と思しき人から友達申請も入ってきます。それも何の予告もなく、何の一言の挨拶もなくです。しかも、基本データを見てもなにひとつ発信主の正体が分からない。

その人たち全員がこの若いライオンとは思わないけれど、

「無理をしないでね。」

「あなたは、あなたらしく生きればイイよ。」

「苦勞されたんですね。」

こういう言葉を発せられて心地よくなったら、それは終わりの始まりなのかも知れないということを、常々からわが心に釘を刺しておくようにしよう。

この示唆に富んだ物語。ティーン・エイジャーが読んだとき、ここからどんなことを引き出すだろうか。20歳台の気鋭の若者が読んだら、何を行間から引き出すだろうか。そして30歳台、40歳台、50歳台、そして、私のような60歳台が、それぞれの世代でそれぞれの人生経験から引き出されることは、おそらく大きく違うところと、逆に似たような所もきっとあるでしょう。

実はこの物語がある中学校の第1学期末テストに出題されました。

## 文豪も悩んだ「読点（、）」

句読点はいつ頃から使われたかご存じですか？

ゆとり教育脱却後、小学生の教科書にも『枕草子』の「春はあけぼの」が掲載されるようになっていますが、枕草子は古代日本語、いわゆる古文で書かれています。それを見ても、ちゃんと句読点が打たれています。

「へえ～。句読点って古くからあるんだね。」

実は、古文中の句読点は、現代人が読みやすいように、古文研究の学者の努力によって打たれているだけで、原文はというと、1文字分が空けられているだけで、実は句読点は存在しなかったのです。

それどころか、「っ」のような促音便や「ん」という撥音便、それにイ音便はまだ存在していませんでした。

例えば、

現代語で「読んで」は古文では「読みて」、「言って」は「言ひ（い）て」、「聞いて」は「聞きて」と表現していました。

ある史料によると、奈良時代の為政者たちは、今に残る古文のような言葉と文体で話していたらしく、さすがに難しすぎるということで、平安朝になると殿上人でさえも現代語と変わらない会話をするようになっていったそうです。

なので、例えば「あそこで子どもが遊んでいるよ」という言葉の中の「ん」という撥音便も日常的に使われていたようですが、「ん」という文字は存在しなかったので書けなかったのです。そして、この「ん」という文字が誰によって考え出されたのかは分かっていませんが、江戸時代中期頃から「ん」という文字が使われ始めたといわれています。

それにくわえて、擬態語や擬声語も平安朝にはなくて、例えば、ねずみの鳴き声としての「チュウチュウ」も「うつくしきもの。瓜にかぎたるちごの顔。すずめの子の、ねず鳴きするに（チュウチュウとねずみの鳴き声の真似をすると）踊り来る」というような表現方法しかなかったようです。

それで、肝心の句読点なのですが、少なくとも公に定められたのは、明治39(1906)年で、当時の文部省が国定教科書の基準とした「句読法案」可決かららしいです。

というのは、富国強兵策をめぐって国民（当時は「帝国臣民」）への教育が不可欠ということで学制が定められたのですが、明治初期にさまざまな区切り文字が乱立し、混乱を極めたのを取める目的で句読点の原則を、いわゆる「法」として定める必要性が生まれたというわけです。

ところが、これに対して反発したのが文豪芥川龍之介でした。つまり、この「句読法案」が気に入らなかったらし

くて、「僕等は句読点の原則すら確立せざる言語上の暗黒時代に生まれたるものなり」と書き残しています。

しかしながら、さすがの龍之介も自ら作家活動が続けていくうちに、句読点の必要性を痛感するようになっていったらしく、そのうちに「句点（。）」の方はともかく、「読点（、）」を打つ意味合いやタイミングなどに深く悩まされるようになります。

芥川龍之介の文章を読むと分かりますが、とにかく情景描写が細部にわたって気づかわれていて、読点がやたらと多いときと、数行にわたって読点がない場合があるところを見ると、苦心惨憺（さんたん）していたことが感じられます。

文豪とは比べるべくもないとはいえ、生徒さんに作文指導をしていても、あるいはこうやって駄文を書いていると、読点を打つ意味合いやタイミングを見つけにくい場面に遭遇することは少なくありません。

### 〈編集後記〉

ニュースレターの発行を重ねるごとに「国語色」が強くなってきているような気がするのですが、まあ、国語指導を得意とする塾とHPでも謳っていますので、これはこれでひとつの方向性なのかなと思っています。というのは、『トロッコ』（芥川龍之介）や『枕草子』の「にくきもの」（清少納言）など、皆さんに紹介し、読解だけでなく優れた文章の楽しみ方などを記事に出来ればと考えているからです。ということで、鋭意精進致します。それにしても、回を重ねるごとに編集後記を書くスペースが狭くなって来ているのは、「執筆者の気のせいじゃね？」とご理解下さると幸いです。（大汗）